

# 史遊会通信

No. 206  
平成 24 年  
2 月 10 日  
発行

事務局  
☎ (03)  
3712-0651  
下山田方

## 一月講演要旨

### 奥の細道を歩く

小田 紘一郎

一、芭蕉の紀行文として、①野ざらし紀行（甲子紀行）、②鹿島紀行、③笈の小文（吉野紀行）、④更級紀行、⑤奥の細道がある。

二、奥の細道は、江戸時代の元禄年間に俳人芭蕉が今の東北、北陸路を旅したものを記したものであり、行程は一四〇日に及び、実に六〇〇里を歩いたものである。芭蕉には曾良が随行し、「曾良随行記」を記している。

奥の細道は、紀行文であるが、事実をそのまま記すのではなく随所に虚構も見られる。

このことは曾良の文章と比較すると、よくわかることである。

三、行程と主要地の到着日を記せば次の通りとなる。

出発・深川三月二十七日（新暦五月十六日）、日光四月一日（五月十九日）、白河の関四月二十日（六月七日）、松島五月九日（六月二十五日）、平泉五月十二日（六月二十六日）、立石寺五月二十七日（七月十三日）、象潟六月十六日（七月三十一日）、出雲崎七月四日（八月十八日）、金沢七月十五日（八月二十九日）、大垣八月二十一日（十月四日）、最終地は長島で旧暦の九月六日となっている。

芭蕉は、各地で多くの日数滞在したが、主な所と日数を記せば、黒羽十三日、尾花沢・金沢は十日、羽黒山・山中温泉八日、須賀川七日ということとなり、これらの地には知

### 例会のお知らせ

#### ◎ 2月例会

日時 平成24年2月22日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 鯨游海氏

テーマ 「名曲に潜む詩情」

— 古文の楽しさ面白さ

自由執筆は太田精一・島津隆子・村上邦治の諸氏

締切 2月末日

#### ◎ 3月例会

日時 平成24年3月28日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 隆 恵氏

テーマ 「韓国歴史ドラマに遊ぶ」

自由執筆は千坂精一・平山善之・中込勝則の諸氏

締切 3月末日

人・弟子が多く住んでおり、俳句の会を催したり、旅の疲れをとったりしたものと考えられる。北限は、今の岩手県の平泉や秋田県の象潟であり、青森県には足を運んでいない。四、この紀行文は、わずか一万三千字という短いものであるが、名文をもって知られ、又名句がちりばめられている。

句は六十二句あり、うち芭蕉の句は五十二句で、あとは曾良の句である。芭蕉の句のうち表日本が十五句、裏日本が三十七句で圧倒的に裏日本が多い。表と裏を分ける地点として最上越えが挙げられており、それは山刀伐峠(四七〇米)である。

文章の良いのは表日本に、俳句の優れたのは裏日本に多いと言われている。松島では芭蕉は句を読めなかった。

文章の名文として、私が好きでその多くを諳んじているものとしては、出発、白河の関、松島、平泉・中尊寺、山寺、象潟などが挙げられる。平泉では、杜甫の「春望」が引用されている。

奥の細道の中から私が好きな十句を選ぶとすれば、次のようなものである。

- (一) 草の戸も住み替る代ぞひなの家(深川)
- (二) あらとうと青葉若葉の日の光 (日光)

- (三) 夏草や兵どもが夢の跡 (平泉・高館)
  - (四) 五月雨の降り残してや光堂 (中尊寺)
  - (五) 閑かさや岩にしみ入る蟬の声 (立石寺)
  - (六) 五月雨をあつめて早し最上川(最上川)
  - (七) 象潟や雨に西施がねぶの花 (象潟)
  - (八) 荒海や佐渡によこたふ天の川(出雲崎)
  - (九) 一家に遊女もねたり萩と月 (市振)
  - (十) 蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ (大垣)
- 五、私の特に好きなのは、序文(出立)の「月日は百代の過客にして…」であり、ここに芭蕉の人生観が記されている。中国の詩人李白を引用しており、概要を対比させつつ記せば次のようになる。

|             |              |
|-------------|--------------|
| 序文(奥の細道)    | 中国(李白)       |
| 月日 百代の過客・天地 | 万物の逆旅・宇宙     |
| 行年 旅人       | ・光陰 百代の過客・年月 |
| 船馬 旅を栖      | ・浮生 夢のごとし・人生 |

旅

宇宙も年月も人生も旅をしている旅人であるとは、何とスケールの大きな表現であり、思想であることだろう。

なお、文学作品であるので事実とはいささか違う点があることは、識者によりしばしば指摘されている。例えば、日光では、新緑のまばゆさがあったであろうが、中尊寺では、

当日は五月雨は降っておらず晴れていた事、石巻へは、道をたがえて行つたと本文ではなっているが、曾良の記録では当初より目指していた事、又金華山は実際は見えない事、更に出雲崎(柏崎という説もある)ではこの時期には天の川は佐渡に横たわっていない事、等々である。

また、文章や句の中に「行く」という言葉が十五カ所程あり、旅をすすめる、奥の細道を行く、更には俳諧道を極めるという意味が楔を打ち込むようにこめられていると指摘されている。(荻原井泉水『奥の細道ノート』)

六、奥の細道以外に私が特に好きな晩年の作品に『幻住庵の記』というものがある。芭蕉の数多くの俳句から私が前記奥の細道を除き十句選ぶとすれば、次のようなものである。

- 旅人と我名よばれん初しぐれ (笈の小文)
- 草臥て宿かるころや藤の花 (〃)
- 野ざらしを心に風のしむ身哉 (野ざらし紀行)
- 山路きて何やらゆかしすみれ草 (〃)
- 古池や蛙飛びこむ水の音 (〃)
- 名月や池をめぐりて夜もすがら

菊の香や奈良には古き仏達

此の道や行く人なしに秋の暮

秋深き隣は何をする人ぞ

旅に病で夢は枯野をかけめぐる

まだまだ数多くの秀句があるが、それらも  
じっくり味わいたいと思っている。

七、終りに

今回、奥の細道を取り上げるに際し、前記の『奥の細道ノート』を再読してみた。裏表紙に三六年、東北大学、明善寮と記されており、朱線にぬりつぶされた本はぼろぼろになつていた。これを持ちながら旅した当時が、大変なつかしく思い出された。あれから五十余年、我人生も旅のようなものであり、浮生であつて、全く夢の如しである感を強くする。

追文一 夏草の句には、自然と人間、生と死、過去と現在、戦争と平和、等々の相反する概念が見事に読みこまれてるように思える。

追文二 今度読みかえしてみても、俳句に「や」の詠嘆の言葉（夏草や、ふり残してや、象潟や）の多さ、更に雨の季語が何ヶ所（中尊寺、最上川、象潟）も読まれていることにあらためて強い印象を持った。

自由執筆

### ポーランドのナチス絶滅収容所

山本 鎮雄

昨年十月の例会で「ナチス強制収容所における生と死」について拙い講演をした。その翌月の『史遊会通信』（二〇三号）に講演要旨を書いたが、時間や紙数の制約でナチス絶滅収容所について触れていない。本号で「追録」することにした。

西ベルリン（当時）に滞在中の私は、一九八七年夏にポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所を見物した。ポーランド陸軍の兵舎を転用したレンガ造りの第一収容所は「抵抗分子」を拘禁した奴隷労働収容所である。

第二収容所は広大な湿地帯にソ連軍捕虜を酷使し、ドイツ陸軍の粗末な木造の馬小屋をモデルにして急造され、軍需生産の奴隷労働収容所と、ガス殺のために偽装されたシャワールームと、大規模なクレマトリウム（死体焼却棟）を付設した絶滅収容所である。

第二収容所はポーランド、ハンガリー、オーストリアなどナチス占領地のユダヤ人やツィゴイナー（シンティ・ロマ）を大量に虐殺

した「死の収容所」の一つである。

私が、ポーランドに造られたアウシュヴィッツ第二収容所を含めて六ヶ所の絶滅収容所の存在を知ったのは、フランスのクロード・ラズマン監督作品の映画『シヨアー』（一九八五年）だった。

ドキュメンタリー映画の衝撃

ラズマンは十一年の歳月をかけ、三五〇時間に及ぶ撮影フィルムを九時間半の劇場用映画に編集した。商業的に成り立つような映画ではないが、各国のテレビで上映され、ベルリン映画祭ではカリガリ賞を受賞した。日本では封切り後の十年目にNHKの衛星放送テレビで三夜連続で放映された。

シヨアー (Shoah) はヘブライ語で「絶滅、破壊」を意味し、ラテン文字に書き換え、ギリシャ語のホロコーストと同義である。この映画は「過去を現代としてよみがえらせ、そして、過去を非時間的な現代性のなかに復元すること」である。要するに、絶滅収容所の遺体処理に従事し、奇跡的に生還した「特別労務班員」の記憶をよみがえらせるために、絶滅収容所その他の場所でインタビューした。

アウシュヴィッツ生存者の証言

ユダヤ系チェコ人で「特別労務班員」に選抜されたフィリップ・ミュラーは、アウシュヴィッツ第一収容所の死体焼却棟で遺体処理に従事した。ガス室に入ることを拒否したユダヤ系チェコ人は、ガス室の入口で親衛隊員から殴打され、ガス室に追いやられた。

かれらはガス室で「チェコの国歌」と「希望」の歌（のちに、イスラエルの国歌）を合唱した。ミュラーはガス室で死んだ女性の遺言に従い、生還して、収容所で目撃し、体験した事実を克明に証言した。

アウシュヴィッツ第二収容所で「特別労務班員」に選抜されたユダヤ系チェコ人のルド

## 祝出版

瀧澤 中著

手に取るようにわかる

### 『太平洋戦争』

日本文芸社

ルフ・ヴァルバは、チェコ人をガス殺するという情報を入手し、かれらに決死の蜂起と、第一収容所のナチス政治犯の幹部に蜂起を呼びかけたが、一斉蜂起に失敗した。

ヴァルバは「首尾よく収容所を脱走できず、しかるべき時、しかるべき場所に、情報を伝えることに成功したら、何かの役に立つはずだ」と考え、仲間とともにアウシュヴィッツから初めて脱走に成功した。

#### トラックの排気ガスによる大量殺戮

ナチス絶滅収容所はポーランドのアウシュヴィッツ第二収容所の他、ヘウムノ、トレブレリナ、ソビブル、ベウジエツツに建造された。ヘウムノ絶滅収容所は一九四一年十二月に開設された。ポーランドのユダヤ人ゲットから移送されユダヤ人は殺害された。その主要な方法は密閉された装甲のトラックのなかに排気ガスを引き入れ、殺害した。親衛隊員は遺体を焼却するために「労働用ユダヤ人」を特別に選抜した。

当時、十三歳の美声の少年シモン・スレブニクは、奇跡的に生還した。戦後、四十七歳のスレブニクはヘウムノを訪問した。彼は遺体を焼却し、人骨を砕き、ナレフ川に投げ捨てたことを証言した。その当時、「もし生き

ているとしても、世界に残るのは、ぼく一人だけだろう」と考えたというのである。

ヘウムノ絶滅収容所のもう一人の生還者、ユダヤ系チェコ人のモルデハイ・ポドフレブレニクは「特別労務班員」に任命され、装甲のトラックの排気ガスで殺害された遺体を運び、すり鉢状に掘った穴に埋める作業に従事させられた。その作業で妻と子供の遺体を見つければ、一緒に死にたいと親衛隊員に申し出たが拒絶された上、引き続き遺体処理のために強制された。

#### ランズマン監督の視点

私が訪問したアウシュヴィッツ収容所は、強制収容所と絶滅収容所という二つの施設があった。私は両者を一体化して理解した。ランズマンは両者を明確に区別し、絶滅収容所の生還者の「記憶―恐怖の記憶―」を現在によみがえらせ、歴史上の惨劇を証言した。

『シヨアー』は、スピルバーク監督の『シンドラーのリスト』のように、ホロコーストを神話と伝説に解体し、イスラエル建国を讃えたフィクション・メロドラマの映画ではなく、世界的に衝撃を与えたドキュメンタリー映画である

自由執筆

柳宗元の「河間伝」について

森下 征二

中唐の柳宗元は、我国では専ら「江雪」を詠った詩人として有名である。しかし、彼が優れた伝奇作家であったことは余り知られていないようだ。

現存する数多の作品の中で、貞淑な女性が一度の過ちから比類なき淫婦に転落する過程を描いた「河間伝」は、間違いなく彼の最高傑作と言えよう。

小説は、「河間は淫婦人なり。その姓を言うを欲せず。故に邑を以て称す……。(河間はみだらな女である。だから、その姓名を言いたくないので、河間と言う、出身地で呼ぶことにする)」と言う衝撃的な出だしで始まる。柳宗元に従って、暫くその粗筋を追ってみよう。

河間は元々貞節な人妻であった。姑に良く使え、夫を心から尊敬し、儒教的教養を理想的に備えた婦人であった。しかし、それが却って親戚の不良の反発を買ってしまう。巧みに外へ連れ出されて犯されそうになったの

だ。最初は抵抗していた河間も、周りの淫らな雰囲気に影響され、徐々に気持ちが悪き相手の男を受け入れる。何しろ相手の若者は、貌(かお)美しく陰大なる者であったからだ。その結果河間が得たものは、これまで夫との間で感じたことがない大きな喜びと満足であった。

ここまではよくある話かもしれない。しかし「河間伝」の特徴は、河間の変化の凄まじさにある。彼女はそれ以後、夫の一切を拒否した。夫が部屋の中へ入れば大声で叫び、目を開こうともしない。それだけではない。彼女は自分の病気を治すためだと偽り、夫を唆して皇帝が禁止していた夜間の祈禱をさせた。そしてあるうことか、河間は夫の行為を官吏に密告し、挙句の果てに答殺させてしまう。

ここで不可解なのは夫の態度だ。将に死せんとする時に当たって猶「吾夫人に背けり(妻に申し訳ない)、吾夫人に背けり」と繰り返したと言うのだ。まさにマゾヒズムの極致である。

一方、河間は夫が刑死した事を大いに喜び、喪に服さないどころか、浮気相手の若者を呼び込んで裸で追いまわし、淫らの限りを

尽くすのである。しかし、それで大団円とは行かないところが、河間の物凄さである。荒淫のため、その可愛い男の精気が衰え始めると、情け容赦もなく追い出してしまふのだ。

それからというもの、彼女は長安の無頼漢を呼び込み、荒淫の限りを尽くす。例え呼ばれた男達が鉢合わせしようと、全く気にもかけない。挙句の果てには、自分の邸宅の隅に酒場を作り、そこに集まってくる大鼻の者、少(わか)くして壮(そう)なる者共を、二階へ呼び上げては交じり合った。そして、その最中でも、良き若者を一人たりとも見逃すまいと、床に開けた穴から、階下の様子を窺ったと言うのである。

しかし、そこまで男を漁っても、彼女は一度も満たされることはなかったようである。こうした淫欲の生活が十年余り続いた結果、河間は病気になって死んでしまう。柳宗元の表現に従えば、河間は髓(ずい)が竭(か)れて死んだのである。

河間の一生は激しい。何が彼女を貞節な人妻から、このような淫婦に変えたのだろうか？

溝部良恵氏は言う。河間は男との情交を通じて、知らないうちに自分を拘束していた、

貞節な妻というあるべき自分の姿から解き放たれて、本能のままに喜び満たされる経験、生きていく実感と言うようなものをつかんだのではないか？ 従って、セックスは相手との関係ではなく、自己の問題であった。彼女にとって大事なものは、男たちとの愛情ではなく、自己の欲望を満足させることである。幾ら性的快楽を求めたとしても、愛情を欠いた関係からは本当の満足は得られない……と。

そうかもしれない。男が考えても、妥当だと思ふ。しかし、私にとって依然として疑問に残るのは、貞節だった彼女が一転して、夫を蛇蝎の如く憎みだした心である。何故、彼女は夫と離婚することを選ばず、殺してしまわなければならなかったのか？ そして夫は、死刑に処される時でさえ妻を恨まないで、何故、妻に済まないと言いつづけたのだろうか？ 鍵はおそらく、柳宗元の生涯にある。何れ私なりにこのエピソードを、彼の人生に絡ませ書き直してみたい。

「河間伝」は読者を、そんな気にさせる伝奇である。

自由執筆

### メディアに扱われる数学(和算)

佐藤 健一

テレビの通常番組から時代劇がほとんどなくなりましたが、それでもいくつかはあります。その中で役者が計算する場面が入るようになったことは、今までとは違うことです。江戸時代ならば計算の道具は「そろばん」と「算木」です。そろばんは現在でも小学校の三年生で取り上げられています。でも、そろばんで計算練習することは、配当時間が極めて少ないことから実際にはやっていないと思われまふ。そろばんが入ってくるまで計算道具は「算木」でした。飛鳥・奈良時代に伝わり多くの人が使った物ですから、江戸時代になって、そろばんが普及していつても、古老と言われていた人たちは算木で計算していたという文献も残っているようです。

東日本大震災のすぐ後に放映されるはずであった「水戸黄門」は十一月に放映されました。この番組で「算木」の計算が行われていたのです。私が指導したのですが、少しレベルの高い問題を選びましたから、そろばん

では出来ないからです。昨年は半年ぐらい「天地明察」の和算部分の変更訂正と問題などに関係していました。小説自体の科学的なことについては作者は全く正しい知識を持っているのですが、監督の滝田氏は作者とは違ったものを想像することもあり、和算については考えられる範囲で作り直しをしました。

確かに渋川春海の数学では出来そうもない改暦をしたのですから、関孝和の協力は必要になるはずですが、説明のしやすい冬至の日を決定する「勾配術」は古くから分っていたとしても、「招差法」を完全に理解していたとは思えません。今でも相関係数などを求めるのに最小二乗法により計算することを高等学校で学びます。でも次元を求めることはしません。招差法の中の「累裁招差法」は関孝和しか分かっていないからです。「円理」についてもそれまでの「弧矢弦之術」は天体では使えません。うまく数値が合うように係数を調節しました。

今年の大河ドラマは「平清盛」ですが、ここでも「算木」を使うシーンがあります。監督や助監督の方たちと相談して、役者が算木で計算する周囲に算木を沢山散らして置く

ことにしました。でたらめに置いてあるように見えますが、それぞれある計算をした形にしました。

自由執筆

### 八年ぶりの授業

(友の会) 中島 茂

昨年四月から週に二回静岡市西郊の県立N高で、二年生クラスに世界史を教えている。八年ぶりの授業である。

N高は安倍川と藁科川の合流点に位置し、晴天の日には富士山の遠景がすばらしい。

三月末に打合せのため出校した際出会った生徒たちの印象は素朴で明るい感じだった。

四月初めのある日授業を終えたとき、入り口の戸を開けた他のクラスの数名の男子生徒が叫んだ。

「先生、年いくつ？」 私はとっさに

「年は無い」と応じた。

「なんでえ！」(どうしてかの意)

私は背後の黒板に74と書き、パツと消した。とたんに周囲に爆笑がおこった。

これで生徒の中にスムーズに入っていける

かなと考えたが、現実はそのなにか甘くはなかった。

話は数年前にさかのぼるが、私は平成十七・十八の両年度、県教育委員会高校教育課のコーチング・スタッフ(非常勤、地理・公民担当)という仕事を勤めた。

「魅力ある授業づくり」を支援するために、県立高校を巡回して、授業を参観し、助言するという役割である。

二年間で延べ二百七十回に近い授業を参観したが、その中にはいはゆる教育困難校の授業もあり、生徒を惹きつけていくために、先生方がひとかたならぬ工夫・努力をされている様をつぶさに見た。

こうした経験を十分に生かせば、私もN高でもっとよい授業ができるはずだが、なかなか思うようにはいかない。

いま私が教えているクラスは二つ、一つは選抜クラス(国公立大学をめざす文系生徒二十名余で構成)で、授業に臨む姿勢もよく、教える側も意欲をかき立てられる。

もう一つは、私立大学文系をめざす生徒四十名余の集団。このクラスの指導はなかなか骨が折れる。私語は絶えないし、教師の指示どおりに行動できない。

二つのクラスとも、世界史Bを大学受験の科目とする生徒はほとんどいないだけに、授業そのものへの興味や関心をかきたてなければならぬ。

それでも多くの試行錯誤を経ること数カ月、やっと私文クラスも授業が成り立つようになった。

この間さまざまなことを考えたが、そのうちの二つほどを述べてみたい。

一つは、現在の「世界史必修」が高校生の現実にそぐわないのではないか、という思いである。

多くの普通科高校では、一年生や二年生で世界史Bを必修とし、三年生での受験科目にたなげている。

また、専門学校では世界史Aを必修としているが、学習指導要領のねらいに沿って教えている教師はほとんどいない。

どちらの場合も、教科書本文のレベルの高さや、カタカナや漢字の人名・地名の多さに辟易してしまう生徒が多い。

すべての高校生に外国の古代史や中世史の知識が必要だろうか。「現代を生きていく生徒にとって必要な知識は何か」という観点から、必修世界史は思いきって「現代世界

「(史)」とし、今日の世界各地のホットな問題を理解するのに役立てるといふ構想はどうだろうか。

それとともに、ゆとり教育の結果、貧弱きわまる地理の基礎的な知識を、この「現代世界(史)」の中で補強していく必要があるだろう。

事務局だより

総会も終わり今年の活動が始まりました。今年度の幹事は、鯨、平山、森下のお三方です。例会日は毎月第四水曜日の夜間の予定です。担当表をご覧の上、皆様の予定表にお組み入れください。尚、ご都合の悪い場合は、お早めに幹事又は事務局へご連絡をお願いします。

気の早い話ですが、今年の忘年会は

十二月十二日(水)夜 学士会館

と決まりました。例会日共々予定をお忘れなくお願いいたします。

史遊会講演者・「史遊会通信」自由執筆者一覧(24年度)

| 講演 |       | 「史遊会通信」執筆者 |     |      |                |       |    |    |
|----|-------|------------|-----|------|----------------|-------|----|----|
| 年月 | 講演者   | No.        | 発行月 | 原稿締切 | 講演要旨           | 自由執筆者 |    |    |
| 1  | 小田紘一郎 | 205        | 1月  | 12月末 | 村上 邦治          | 鍋屋    | 高橋 | 中山 |
| 2  | 鯨 游 海 | 206        | 2月  | 1月末  | 小田紘一郎          | 森下    | 佐藤 | 山本 |
| 3  | 隆 恵   | 207        | 3月  | 2月末  | 鯨 游 海          | 村上    | 島津 | 太田 |
| 4  | 鍋屋 次郎 | 208        | 4月  | 3月末  | 隆 恵            | 千坂    | 平山 | 中込 |
| 5  | 森下 征二 | 209        | 5月  | 4月末  | 鍋屋 次郎          | 三戸岡   | 鯨  | 隆  |
| 6  | 平山 善之 | 210        | 6月  | 5月末  | 森下 征二          | 小田    | 中込 | 千坂 |
| 7  | 招待 講師 | 211        | 7月  | 6月末  | 平山 善之          | 新井    | 柴田 | 瀧澤 |
| 8  | 休み    |            |     |      |                |       |    |    |
| 9  | 佐藤 健一 | 212        | 9月  | 8月末  | 招待 講師          | 鍋屋    | 高橋 | 中山 |
| 10 | 瀧澤 中  | 213        | 10月 | 9月末  | 佐藤 健一          | 山本    | 太田 | 森下 |
| 11 | 中山 喬央 | 214        | 11月 | 10月末 | 瀧澤 中           | 佐藤    | 村上 | 鯨  |
| 12 | (忘年会) | 215        | 12月 | 11月末 | 今年感動した三冊の本(全員) |       |    |    |